

# 孤独の力



五木寛之

Itsuki Hiroyuki

## 孤独は力である!

今、生きるためにもっとも必要なもの。

それは孤独の力である。

五木寛之の渾身の語り下ろしに、

堀田善衛氏との『方丈記』(鴨長明)についての貴重な対話を収録

東京書籍

孤独者について考えるとき、重要な視点として、老人などの「徘徊<sup>はいかい</sup>」という現象があると思う。それについてまず考えてみたい。

### ホモ・モーベンスとして

先日、長尾和宏<sup>ながおかつひろ</sup>さんという、臨床医<sup>りんしんしやうい</sup>として多くの人びとの治療にあたられてきた方の書かれた本（『ばあちゃん、介護施設を間違えたらもっとボケるで！』丸尾多重子と共著、ブックマン社）を読んだ。

その文章の中に、「徘徊<sup>はいかい</sup>」という言葉を、何か怪しいもの、嫌なもの、情けないものだというような感覚を持つのは間違っているのではないか、という趣旨の言葉があったことを思い出している。

人間は、アルツハイマーや認知症<sup>ちやうしやう</sup>を思うと、「徘徊<sup>はいかい</sup>」といわれる現象を起こすことがある。これもNHKによると、年間約一万人の老人が、徘徊<sup>はいかい</sup>によって行方不明になっているという。その多くは見つけだされるとしても、驚くべき数字である。

徘徊<sup>はいかい</sup>しようとする人間を部屋に閉じこめておこうとすると、無理やりにも外に出よう

とするという。二階の窓から飛びおり、大怪我<sup>おおけが</sup>をした女性の例もある。非常な外出への情熱である。

しかし、そのことは、ひょっとしたら、ふだん私たちを縛<sup>しば</sup>っている理性や常識などの拘束から自由になった人間の、正直な本能的な反応ではなからうか、とその本を読んでからは思うようになった。

ホモ・モーベンス（動民）、という言い方がある。ホモ・サピエンス（現生人類<sup>げんせいじんるい</sup>）はホモ・モーベンスである。直立二足歩行を始めた時代から、歩いたり動いたり、そのへんを徘徊したり、野を歩いたり山を歩いたり、動きまわる姿こそが、人間の生き方の本来の姿かもしれないという気がしているのだ。

だから、ある年齢に達し、世間的な絆や常識のタガが外れたときに、人間のこころの奥深くに隠されている、放浪<sup>ほうろう</sup>、移動する欲求、そうしたものが表に現れ、徘徊<sup>はいかい</sup>という現象を起こしているのかもしれない、というふうに思うところがある。

かつて、日本で定住せずに山中などで暮らす人びとの生活が民俗学的に話題になったことがあった。

「サンカと称する者の生活については、永い間にいろいろな話を聴いている。我々平地の

住民との一番大きな相違は、穀物果樹家畜を当てにしておらぬ点、次には定まった場処に家のないという点であるかと思う。」(柳田國男『山の人生』)

ここにある、「サンカ」と呼ばれた人びとのことである。

同じように、ヨーロッパでも、「ロマ」という、定住しない民がいた。

彼らは、それぞれの国で、さまざまな名前で呼ばれてきた。世界中のありとあらゆる所に、定住しないで動きまわる人びとがいたのだ。

柳田國男が「常民」と名づけた、定着して農耕を営む人びとではない。風のように訪れ、<sup>まれびと</sup>「客人」(折口信夫)として遇され、また風のように去っていく。定住していないがゆえに蔑視と尊望<sup>べつし せんぼう</sup>の中で生きる。そんな人びとの歴史を小説に書いたことがある。

いまでも、そんな生き方があるのではなからうか。

それを「ノマド」(遊牧民)的な生き方と呼ぶこともある。

人間は本来、定住という生き方にそぐわない、抑えきれない動的な衝動<sup>しやうどう</sup>を持っているのかもしれない。

## 絆と徘徊<sup>はいかい</sup>

長い歴史の中で、私たちは否応なく、国民と国家という一つの「絆」によって、この国に定住するのが当然のように思われてきた。

しかし、古く、人間のこころの奥にある古代の記憶、古代以前の記憶をたどっていくと、ホモ・モーベンスの本能というものが、ひそかに、こころとからだの奥底に潜<sup>ひそ</sup>んでいるのではなからうかと思う。

そして、年齢が八十になり、九十になり、百歳にもなれば、こころを抑えつけていたものがなくなり、その本能の発露<sup>はつろ</sup>として、徘徊<sup>はいかい</sup>という一つの症状が現れてくることもあるのだ。かつては、命の危険さえともなうような徘徊行動を抑止するためには、からだをベッドに縛りつける以外に方法はなかったともいう。窓を開けて二階から飛びおる老人さえもいたぐらいだし、突如として人に襲いかかって飛びだすような人もいた。だからかつての一部の精神科病院でおこなわれていたような、拘束<sup>こうそく</sup>する用具によってからだを固定するしかなかつたのだ。